

# ドクター+フジ

## ニッポン ドクター和の 臨終図巻



最近「孤独」についての取材をよく受けます。死とは誰しも孤独なものです、とお話しています。

しかし亡くなった後で、大勢の人が泣いている場面に出会うと、この人には本当の友達が大勢いたんだな、いい人だったんだなと思います。逆に、どんなに立派なお葬式でも、あれ、誰も心から泣いていないぞ? と感じる場面もあります。

昔、20代の末期がんの男性を在宅で受け持ったときのこと。臨終の前に100人以上の友人が家に集まり、その子らを掻き分けるようにして彼の部屋まで送り着きました。大勢の仲間が号泣しながら

### 52 元女子プロレスラー 渡辺えりか

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫二庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどきはいずれもベストセラー」。関西国際大学客員教授。

らのお看取りでした。気づけば私も一緒に号泣。元女子プロレスラーの渡辺えりかさんの訃報を読んで、つい思い出したのです。

渡辺さんは4月20日、胃がんのため逝去。39歳でした。直後よりレスラー仲間からの哀悼がSNSに溢れました。大勢の先輩後輩から涙で見送られるのは

ある意味、若い人だからできる旅立ち方です。長生きすればするほど、本当に泣いてくれる仲間も減りますから。

渡辺さんは以前から心臓の疾患に悩まされ、2006年にプロレスを引退していました。そして、13年9月、35歳のときに胃がんステージ3bと診断。15年3月には肝臓など3カ所に転移していることがわかり、一も

う手術はできない。抗がん剤がうまくいって2年。奇跡が起きて3年と思ってください。との余命宣告を受けました。彼女にはまだ小学生の息子さんがいました。

絶対に生きてやるという想いを昔の仲間達に受け止め、プロレス会場に募金箱が置かれたり、フリーマーケットなどを開いたりして、皆で治療費を集めたようです。その甲斐

「絶対」に生きてやるという想いを昔の仲間達に受け止め、プロレス会場に募金箱が置かれたり、フリーマーケットなどを開いたりして、皆で治療費を集めたようです。その甲斐

大好きな家族、仲間、料理が起こした



# 「奇跡の3年」

あって一時がんは小さくなり、「恩返しできるように、がん細胞をギッターンギッターンにしてやんなきゃ」などとレスラーらしい頼もしい発言をしています。若い世代のピロリ菌感染率の低下によって、胃がんの好発年齢が高齢化しています。しかし、ときどき彼女のように若くして胃がんになる人もいます。

もし早期発見ができれば切除して完治する場合も多くありますが、わが国の胃がん検診の対象は50歳以上(X線検査は40歳以上で実施可)。30代の胃がんの早期発見は困難と言わざるを得ません。また、初期には何ら自覚症状がないことがほとんどです。

渡辺さんは料理が大好きでした。3月28日のブログには、「(1カ月後の)お誕生日にこれ欲しい!誕生日までは何があっても死ねないわ」とホットサンドメーカーをおねだり。息子さんに作ってあげたかったのでしょう。大好きな家族、仲間、料理。この3つがあったからこそ、「奇跡の3年」を生きられたのだと思います。